

# 絵画修復家のアトリエから

加賀優記子 絵画修復家

昨年1月27日に行なった全面協での講演でのプロジェクト不調のリベンジのため、今年も2月9日に、再度修復をテーマに講演をさせていただきました。で、今回は機械もマイクも絶好調だったので、肝心の話す本人が風邪で熱と鼻水にさいなまれていて、なんだかまたまた聞き苦しくて申し訳ない感じの講演会になってしまいました。「そういえば去年も風邪を引いてると言っていましたよ？」と指摘されて、この時期の講演はなんと危険なことか、と思いました。それとフト思い出したんだけど、もしかして去年と同じ洋服を着ていたよう気がする……？

お話ししたいことが一杯有りすぎて、修復のデモンストラーションとか、ニスの

お話とか最後はなんだか尻切れトンボの状況になってしまった。リベンジではなく、またいつか続きをお話したいものです。

では今日のお話です——  
娘の通う幼稚園のお母さん達の間で、私が修復家であることが口コミで広がって、数名に是非工房を見せて欲しいと頼まれ、先日皆さんをアトリエにお連れしました。  
セキユリティを解除してアトリエに入った途端、皆がわあっと歓声を上げ、そこかしこにある絵に見入っていました。中でも一人、その場に立ってうーんと手を上げて深呼吸をし、「アーいい気持ち、これだわ、私の求めていた空気は！」と

言ったのには驚いてしまった。だってここではトルエンは使うし、エタノールや防黴剤、その他もろもろ体に悪いものばかりを扱っていて、時に我々は、防毒マスクだつて着ける事があるくらいなのだから。何だつてこの人はそんなことを言うのだろうと不思議に思つて聞いてみると、「ここ15年来、2人の子供の子育てのために、自分のやりたい事はすべてあつちに置いておいたの。そうしたらいつの間にか一体自分が何をやりたいのか、と言う事すら、もう判らなくなつてしまつた……。このアトリエの匂いは、そうした日常生活とはかけ離れた、スリリングな、芸術の匂いがある。」と、言つた。きつと、彼女にとつてこの匂いは、忘れていた自分が自分で居られた時代の、自由や創造性を孕んだ空気に似ていたのかもしれない。(ちなみに彼女は結婚するまで大手広告会社、H社の第一線で働いていたのだ。)

うーん、分かる気がします……。かく言う私も、家事、育児、仕事、の3拘束の真っ只中。自分が何をしたいかなんて考える暇も無い。ただひたすら今は、「何もしないで休んでみたい。」と思うだけですから。  
そう言えば、週に一度アトリエで絵画教室を開いているのだけど、ここに来るおばさん達も、みな同じ事を言います。「私ね、もうここにこられるだけで幸せ。退職した主人も、姑もみんな置いて1週間に一度だけ自分を取り戻しに来るんです。」そう言つて描いている彼女の絵は、美大生なんかをはるかに凌駕する水準にある。60歳で始め、70歳近くになる今、普通の家庭に置いておくのがそぐわない程、超絶技巧の上手い作品を作る。でも、家の中にはそれを置いておくスペースも「立場」も無いので、2階の屋外のバルコニーに放置しているらしい。私がネットですれれば？とけしにかけても、「誰の邪魔にならない程度に私はちょっと描いているだけでいいの。」なんて言う。

うちの絵画教室はひどく変わつて10年近く前に始めて以来、誰もやめない。(しばらく家庭の事情などで中断しても、また戻ってくる。)10人がマックスなので、新たに募集もかけない。だから、ホント、いつも同じメンバーなのだ。この頃は、どうもみんな本当にお葬式を出すまで絶対に通つてきそうだ、という事も現実味を帯びてきている。そういう私のも、皆が見てきているのだと思う。まだ若くてミニスカート穿いてた時代も、今より10キロ痩せていた私も、独身の私も。  
うちのアトリエは全然同じテーマで作品を作らない。全員が、好き勝手なことを好き勝手な時に始める。(教えるのはだからとつても大変。)板に石膏を塗って金箔テンペラをやりだす人。静物をデッサンする人。旅行して撮つてきた写真で風景を描く人。バラバラだけど、それぞれ「個展をやるんだ」とか、「孫にあげるんだ」とか、各自に目的があるので、やる気満々。それに、ひとつの作品を確実に完成させる事で、(うちは最後にサインを入れる事を重視している。それは、ひとつの作品に自分の全責任をきちんと持ったという証、またサインひとつで作品に重要なアクセントを与えるから。)いい加減に流して描かない、だからだろと描かない、必ず完成させる事で、ひとつひとつの作品で成長を遂げ、ワンステツプ上がる事が出来る、と私が考えているからです。そうして生活の中で孫の世話をし、老人介護をしながら10年かけて



静かに皆はハイ・レベルな描き手になった。ひたむきな人間の底力ですね。実は、白状するとみんなに教えていて、私のほうがいつもひそかに思っている。「なんで、皆こんな面倒なことやる気になるのかなあ、えらいなあ、」つて。今の私は、どうしたつて自分で絵を描く気

アトリエ風景。クリスマス時期は、毎年恒例、「全員でそれぞれ好きな画家の模写を描きます。今回も傑作が揃いました。

になれないのです。まずは体力的に、時間的に、今はまったく無理。それでも、よくよく考えると、おそらく私の夢は、いつか子供が手を離れたら、もう一度すべてをかかぐり捨てるように初心に戻つて絵を描きたい、と言う事。つまり、今アトリエで頑張つて余生を充実させているこの方達と同じになるのだな。……  
先日の、手をんーつとあげて深呼吸をした彼女の姿はとつても可愛かった。あれつと思つた。彼女は何も見失つていないじゃないの、羨ましいほどにピュアな感性をまだ持っているから、こんなこと言うんだわ。それを自分で判らないだけなんだなつて。絵画教室に集まつているおばさん達も、みんな可愛い。純粹に絵を描く、ということのお手本みたいですよ。そして絵の真っ只中に居るはずの私が今もつともダメですね……。彼女の言うところのいい匂い、非日常的な芸術の匂いを体中にしみこませて帰ってくるのに、たぶん私の五感には彼らよりはまだまだ閉じていると思う。  
人生は短い！一つ一つコツコツと、ひつそりと自分の五感を開いている人達に、今夜は敬意を込めて書きました。(つづく)